

大賞

『手紙』

東野圭吾著、文藝春秋、2006.

古川 美優（経営学部 経営学科 4年）

拝啓 冬が駆け足で近づいてまいりました。

この手紙を読んでいるあなたはさぞ驚いていることだと思います。私から急にこんな手紙がきたのだから。

だけどそんな大したことがあったわけではなくて、今度私の在籍する大学でお勧めの本を紹介するというコンテストが開かれることになったのです。その内容をあなたにもみてほしい、できれば添削してほしいと思ったからなんです。

次の文章からがその内容になっているので、みてもらえないでしょうか？

「手紙。この本はタイトルの通り、手紙が重要な役割をもつ話である。

主人公である武島直貴はごく平凡な男だった。しかしある日から“強盗殺人犯の弟”という肩書をもつようになった。そんな彼の人生を追いかけていく話になっている。

ここで気づいた方もいるだろうが、この本では手紙とは服役中の彼の兄から月に一度届くものを指している。彼にとって兄はただ一人の家族だった。前略。元気ですか。そんな文が手紙の最初に書かれていることが多かった。彼の兄も同様に弟のことを想っていたことがわかる。

しかし彼は徐々にその手紙の存在が、そして兄の存在が疎ましくなっていく。なぜなら、彼が普通の生活を望み、そのために努力しているときにいつもその手紙が邪魔をしてきたからだった。進学を考えたとき、就職をするとき、恋愛をしたいと思ったとき、大きな夢を叶えたいと望んだとき。

彼自身はなにもしていないはずなのに、周りの人間や社会からはまるで普通の人間ではないように扱われる。同情、軽蔑、距離を置く、そんな対応がされる。中には彼に寄り添うような人もいたが、その人たちとの関係もまた兄からの手紙が邪魔をする。一通の手紙が彼の人生を大きく揺るがせていく。

私たちには関係ない、起こるはずがないといえるような話だと感じると思う。しかし、実際に彼のような人が周りにいれば、多く人間は彼を避けようとするのではないだろうか。一つでも自分にとって面倒事がおこらないように生きていく。賢く生きていくための行動を起こす。それは自分や自分の大切な人を守るための行動で、決して悪いことではない。

しかし、それは一種の差別として分類されるのではないだろうか。何も直接的な危害を加えたり、攻撃的なことをするだけが差別ではない。この言葉の意味を正確に理解するには、私のお勧めする手紙という本を読んでみるのがいいのではないだろうか。

この本は読んでいる者にじわりと得も言われぬ感覚をもたせる。読み終わったときの胸のざわめきは数日たっても残ったままだった。数か月経てば、この本の内容なんてすっかり忘れてしまうかもしれない。それもまた現実であって、知らないうちに差別してしまうことになるのだろうか。それでも私はこの本をあなたにお勧めしたい。」

どうだったでしょうか？お返事お待ちしております。

時節柄くれぐれもご自愛くださいませ。

敬具